
バカとバンドと召喚獣

スポット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとバンドと召喚獣

【Nコード】

N6453Z

【作者名】

スポット

【あらすじ】

私立文月学園に通う少年滝川廉太郎と、同じく私立文月学園に通う少女小室麻衣は二年時クラスを決める大事な大事な振り分け試験をさぼって、高校生バンド O のメジャーデビュー一周年記念ライブに参加していた。・・・観客としてでは無い、スタッフとしても無い、演奏者 バンドメンバーとして参加していた。ちゅーか二人ともバンドのメンバーだった。

これはライブのために振り分け試験を休み、Fクラスとなってしまうった少年と少女の奮闘記 　　って書くとかっこいいけどそんなも

んじゃない気がする。

「けいおん！」はあんま出てきません。設定としては「けいおん！」の約10年後の世界で、放課後ティータイムは0の先輩バンドとして出てきます。

プロローグ（前書き）

初投稿の小説です。是非みていただけるとありがたいと思っております。プロット無しの見切り発進ですがよろしくお願ひします。

プロローグ

「今日は私たちのバンドニライコールゼロのライブに来てくれてありがとう!!」
目の前で俺の幼馴染でニライコールゼロのリーダーでギターの小室麻衣がトークを始めていた。

この時間は結構暇だったりする。だってあいつ無駄にトークは上手いけど、同時に無駄に長いし。まあニライコールゼロのファンがいる要素の一つではあるんだが、正直暇なもんは暇だ。

ということ、今日本来なら受けているはずだった文月学園の振り分け試験に思いをはせる。

（はあ。振り分け試験受けたかった・・・今年はFクラスで一年を過ごすことになりそうだ。・・・泣きたい。）
やばい。ライブの途中なのにとてつもなくメガタイプになりそうだっていうかなってしてしまう・・・ここは麻衣のトークでも聞いて気を紛らわそう。

「では、一曲目いってみまそう!あ!噛んじゃった!」

「...ワーーー!」

噛んじゃだめだろ!そしてファンの皆さんも麻衣が噛んだからって盛り上がらないで!!

ていうかネガティブになってるうちにトーク終わっていたみたいだ。

「気を取り直して一曲目行きましょう!」I loved you

「

『I loved you』はドラムの俺のカウントから始まる。

よし!いったるぞ!

「ワン!ツー!スリー!フォー!」

ボーカル&リズムギターの小室麻衣とメインギターの木村唯がギターを奏でる。

ベースの後藤昴とドラムの俺 滝川廉太郎がリズムを刻む。

このバンドは麻衣と唯の女性二人がギターで、昴と俺の男性二人が

プロローグ（後書き）

感想求ム。いやマジで。

第一話〈振り分け試験を休んだ結果〉（前書き）

第一話です。思ったより時間かかるなあ。前回より長いですが、是非お読みください。

第一話 振り分け試験を休んだ結果

「起きなさい、廉太郎」

朝、母親に文字通りたたき起こされた。文字通りつまりほんとに叩かれた。布団たたきは地味に痛いといっす。

普段なら高校生なって母親に起こされるなどという失態は犯さないのだが、昨日一周年記念ライブの打ち上げがあり、夜更かしすぎってしまった。

「起きなさい、廉太郎」

「分かったから！起きるから！もう叩くのやめろ！地味に痛いよ！」
「起きたようなら布団から出てください。私はあなたが稼ぐようになってから仕事を辞めたので、今は専業主婦です。ゆえに専業主婦としての役目を果たさなければなりません。ということ布団を干そうと思います。朝食はすでに置いてあるので、速く食べたください。それにしても珍しいですね。廉太郎はいつも朝早く起きて、ドラムを練習しているのに今日はでき無さそうですね（笑）」

「長い！説明口調やめい！最後の（笑）うざい！ちゅーかそもそも朝からボケるな！そして地の文で説明しなきゃいけないところまで説明御苦労さま！」

「最後のメタ発言おかしいでしょ……さっさと布団から出なさい」
「はいはい」

滝川廉太郎。16年生きているが、いまだに母親のキャラがつかめない。

顔を洗って食卓につくと、すでに妹が朝食を食べ始めていた。

「兄貴おはよ」

「ん。雪菜おは。」

妹の名前は滝川雪菜^{たきがわゆきな}。どこに出しても胸を張れる自慢の妹で、1

4歳だ。

雪菜にあいさつし、もきゅもきゅ朝食を食べる。もきゅもきゅってなんか響きが可愛いよね。

「兄貴がなんか変態的なことを考えてる。」

……妹になんと言われようと、もきゅもきゅは可愛い。もきゅもきゅ。

「ていうか心を読むな！」

「別に読んでないよ。ただ顔が変態的だった。」

思春期なのか、最近妙に妹が反抗的だ。グス。

そんな平和な朝の日常。

「いつてきま〜す」

「もういくの？ちよっとぐらいならドラム叩く時間残っているでしょっ？」

「中途半端に叩くのはちよっとねえ。それに今日は振り分け試験の結果発表の日だし。」

「振り分け試験受けて無いでしょう……まあ頑張ってやりなさい。」

「ん。ではいつてきま〜す」

家を出て文月学園に向かう。すると途中でゆっく〜りゆっく〜りフラフラしながら歩いている麻衣まいを見つけた。

「お〜い麻衣〜」

……無反応。あいつ大丈夫だろうか？試しに肩を叩いてみるとようやく反応を示した。

「あ、廉太郎おはよー」

「麻衣、大丈夫か？」

「う〜ん。ちよっとこの前のライブの余韻がまだ残ってて……。ああ成功したんだなみたいな。」

「いつまで残ってんだよ……ギター危ないからもっところか？」

麻衣は今日（ていうかいつも）ギターを背負って登校している。

俺？ドラムは流石に持っていかないけど、スティックだけ持っている。特に意味は無いんだけどね……

「うっん。大丈夫だと思う。」

「思いつて……無理すんなよ。」

フラフラと歩く麻衣を心配しながらも、ようやく文月学園に到着した。校門のすぐ近くで鉄人という愛称で生徒から親しみをこめて呼ばれている（嘘）西村教諭がクラスが書かれている紙が入っているであろう封筒を配っていた。大変だなあ。

「それにしてもFクラスかあ。」

「Fクラスだねえ。」

そう。俺らはライブで振り分け試験を欠席したがために、すでにFクラスが決定している。だから西村教諭にいちいち配ってもらわなくても、困らないのだ。今は生徒が少ないから良いけど、もう少ししたら生徒が増えて配りきるのが難しくなるだろうに……

「おはようございます西村教諭。」

「おはようございます。」

「おお滝川たきがわと小室こむろか。お前らは分かっているだろうがFクラスだ。」

西村教諭がいちいち言わなくても分かっていることを言ってきた。

「分かっていますよ。」少しいらだち気味にそう答えるが、なおも西

もう鉄人で良いや。鉄人は続ける

「本当に良かったのか？いくらライブのためといえ、振り分け試験を休むなんて。」

麻衣が明らかに機嫌悪そうに見えるが、鉄人が聞きたくなるのも分からなくもない。俺はDかC位には行けただろうし、麻衣はCかB位には行けただろう。だが

「西村先生。私たちのバンドにとってあのライブは本当に大事なライブだったんです。私たちは自分の仕事に誇りを持ってやっているんです。確かに学業は大事かもしれませんが、でも私たちにとっては仕事のほうが大切なんです。私たちにとって、あのバンドは生きがいなんです。ねえ廉太郎。」

「急に話を振るな。まあ麻衣の言う通りです。それに楽しみにしているファンの方もいますしね。」

「そうか。後悔してないなら良かった。」そう答える鉄人の顔は、心なしかとても優しく見えた。

教室についたとき、ようやく俺らは振り分け試験を休んだことがいかにとんでもないことだったかを目撃する。

「これはひどいね・・・」麻衣が俺の隣でつぶやく。

「ああ。ホントにひどい。」

本当に最悪だ。俺らの目の前にあるFクラスの教室は、二人の想像を超えてボロボロだった。

畳は腐りかけで卓袱台は足が折れている・・・ていうかそもそも畳と卓袱台の時点でおかしい。教室の中は隙間風がふき、心なしかカビ臭い。いたるところに蜘蛛の巣があり、教室はひび割れている。

「こんなん教室ちゃうわ……」麻衣はショックのあまり関西弁になっってしまったようだ。

「ライブやらんと振り分け試験受けた方が良かったかもしれへん」

…「この時はようやく、鉄人が言っていた意味が分かった。そしてやっぱり関西弁になっていた。

「はあ。」俺らの溜息が重なるが後悔先に立たず。

こうして、俺らのFクラスでの一年は深い深い溜息から始まった。

第一話 〱 振り分け試験を休んだ結果 〱 (後書き)

感想求ム。

第二話〈担任は驚きのあの人〉（前書き）

第二話。意味深なサブタイトルですが、担任は原作と変わっていません。ではどうぞ。

第二話〜担任は驚きのあの人〜

悔やんでもしかたが無い。確かに教室はひどいが、ライブは成功したから良かっただろう。……そう思わないとやっていけない。まあ実際悔やんでも仕方が無いから、教室に入ろう。

「おはよ〜」挨拶は大事だ。ただでさえ酷い教室なのに、さらに級友達と良い仲が築けなかったりしたら悲惨なことになるだろうし。

「美少女キタ〜〜〜」

なんだかこの級友達とは仲良くならなくても良い気がしてきた。直感だが。

しかし美少女ねえ。確かに麻衣はその容姿でファンがつく位美少女だ。

胸は別にそこまで大きいわけではない。精々C位だ。しかしスラリとした体形と相まって、巨乳よりもでかいわけではないがあるという絶妙な大きさがちょうど良い。

肌は真っ白とは言えないが（別に日焼けして黒いわけではない）、むしろその方が背中に背負う少年っぽいギターケースと合っていて、活動的なイメージがある。

髪の色は薄い茶色で、肩にかかる位の長さで、これまた活発的で接しやすいイメージがある。

顔はどことなく中性的で、かといって少年のようと形容するにはパーツが女性らしく、少年のように見えるわけではない。しかしなぜだか中性的に見えるのは、純粹でキラキラした瞳のおかげだと俺は睨んでいる。

ようするに総合すると、かつこいいギターケースを背負った美少女だ。かなりはしょった気もするが気のせいだろう。

「お、おはよ〜」麻衣が少しおびえた様子で挨拶しているが、無理もないだろう。いつもは外見の印象に違わず活発でフレンドリーな

んだけどな……まあそれでも一応笑顔なのはもう一種の職業病だろう。

「今の笑顔みたか？」「ああ。困惑しながらも浮かべる笑み」「萌えだな」「ああ萌えだ」

……一度ぶちのめしたくなかった。そしてどうやら俺たちの正体に気付いている人はいないようだった。いや別に隠したいわけではないが、公表はしていない。

その後色々とおつたのだが、限りなくだるいので省略。

今麻衣は友人の島田美波しまたみなみと話している。島田のことは詳しくは知らないんだが、麻衣いわく去年のクラスメイト吉井明久よしあきひさに好意を寄せているが、照れ隠しツンデレなで暴行するため、全く気付いてもらえていないらしい。

その吉井明久については、麻衣いわく『真正銘のバカ』らしい。まあ入学式にセーラー服で来てたし……弁明の余地は無いように思える。こいつは今なぜか教卓の前で仁王立ちしている坂本雄二さかもとゆうじの悪友で親友らしい。

坂本雄二は野性味たっぷりの顔で、体つきも筋肉質でがっちりしているため、いかにも喧嘩なれしている雰囲気がある。……しかしなぜすでにチャイムが鳴ったのに教卓の前で仁王立ちしているのだろうか……？本来ならそれをとがめるはずの教師はなぜかいないすでにチャイムは鳴っているのに……

坂本を観察していると、ふと目があった。そしてなぜかこつちをみて笑ってきあがった。……キメエ

俺が坂本に対しなにか生理的に受け付けられない類の気持ち悪さを感じ、少しトイレにいつて吐いてこようと真剣に考えてドアに顔を向けると、だれかが早足で近づいてくる気配がした。ようやく担任が来たかと思いい待ち構えていると、やってきたのはどう見ても担任では無く、少しネジが緩いような雰囲気がある少年が入ってきた。

おそらくこの少年が吉井明久だろう。

「すみませんちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ！このウジ虫野郎！」

……初日吉井明久から遅刻する方もどうかと思うが、その挨拶はどうなんだ？坂本……

「ところでなんで雄二はそんなところにいるのさ？」それは俺も疑問に思う。

「ああ先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた。

何せ俺がここの最高成績保持者……つまり、代表なんでな」なるほど分からん。

「ね？あの二人仲良いでしょ」俺が首を傾げていると、麻衣がその声をかけてきた。

「仲が良いねえ……」だが残念ながらドアの近くで頭の悪い喧嘩をしているあいつらは仲良いには見えない。

「喧嘩するほど仲が良いとはいいが、無理があるんじゃないか？」

「うん。でもホントに仲良いんだよ。お互いを信頼し合っていて」

「そういうもんなのかあ？」俺は首をかしげながら二人を見るが、やっぱり仲良いには見えなかった。

やつらの喧嘩は見てる分には面白いが、ドアの前だと邪魔だろう。

そろそろ担任教師もきそうで、邪魔になりそうだったので「おいそこのバカ二人。そろそろ担任くるぞ」と親切心から声をかけてやったら、「こいつと一緒にするな！！」と憤慨していた。

「麻衣、こいつら息ぴったりだな。もしかしたらホントに仲がいいのかもしれん」

「でしょ」

「無視をするなあ〜！！」

無視して麻衣と話をしていると、なぜか火に油を注いでしまったらしく、こちらに向かってくる。身の危険を感じた俺は、咄嗟に靴から武器バチを取り出し、臨戦態勢に入る。殴り合いに突入するかと思わ

れた一歩手前、教室のドアが開いて担任教師が入ってきた。

「君たち。席につきなさい」担任教師がそう注意すると、

「「チツ」「あろうことかこの二人組舌打ちしてきやがった……」

(新学期そうそう目付けられたなあ)

すごく面倒くさい。

俺が少しネガティブになっていると、

「廉太郎あの担任もしかして……」と麻衣が声をかけてきた。なんだかよくわからないが担任を見てみると、そこには今はもう覇気が無くなっていて、スーツもヨロヨロでネクタイもきちんとしてしまっていない、ダラツとした中年の福原慎ふくはらしんが立っていた。

「福原さん!!」

第二話〈担任は驚きのあの人〉（後書き）

プロット無しで方針すら決めず見切り発進で始めたこの小説ですが、ようやく方針が決まりました。廉太郎が驚いて叫んだ理由は次話で、まさかの福原さんがストーリーに絡んでくる予定ですが、感想をいただけたら非常にうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453z/>

バカとバンドと召喚獣

2011年12月27日10時54分発行